

甘しょ澱粉生産の話 (2)

鹿児島県澱粉協同組合連合会 専務理事 榎 木 輝 男

澱粉が食品としてその需要が増大するにつれて、明治末期頃から本格的な生産が行われるようになってきました。

その頃の記録として、当時の澱粉の本場である千葉方面では、甘しょ澱粉の生産量53万貫（約2000 t）、金額で18万円也、明治42年頃の澱粉は、1 貫（3.75kg）当り34銭程度であった、とあります。明治の頃の甘しょ澱粉の生産量は充分把握していないが、明治15年から明治18年頃は年間4－5万貫（15,6 t）、明治30年以降には、40万貫から50万貫（150 t－200 t）程度の生産量であったようです。

7. 大正期の甘しょ澱粉

大正期に入ると、澱粉の消費も活発になってきました。特に大正3年、欧州大戦が勃発して澱粉の海外取引が行われるようになりました。

当時の原料用甘しょは、10貫当り（37.5kg）30銭、澱粉10貫当り 3 円80銭でした。

これが戦争が長びいて、原料用甘しょは10貫当り 1 円50銭、澱粉は10貫当り 8 円から時には10円で取引されたとあります。

また、水飴の製造も、新技術としての酸糖化法が採用されるに及んで澱粉製造の方法も画期的に進歩し、電動機を使用した澱粉製造分離機が使用されるようになりました。

当時のわが国は、澱粉消費に対して生産が伴わなかったので外国から輸入していましたが、大戦を

境にして逆に澱粉生産が伸びて、国外への輸出が拡大されるようになりました。しかしこれも大戦が終るや、世界的な経済界の一大恐慌に会って消費は減退し、価格は暴落し、破産倒産する澱粉業者もみられました。これは大正9年のことです。

その後、経済はやや小康状態を保ったものの、大正13年の金の解禁によって、外国産澱粉の輸入攻勢に会い、業者は四苦八苦の赤字経営に悩まされて青息吐息の状態に追い込まれたといわれています。

そこで外国産澱粉の関税引上げ問題が起こり、業界の全国組織を結成する動きが高まりました。これらの運動によって、外澱への関税の大巾引上げを国が行い、澱粉企業も漸く愁眉を開くに至りました。

その頃農村では、甘しょ作は極めて重要な作目で、澱粉の売れゆきが大きく農家の経済にも影響したといわれています（表3）。

8. 昭和初期の澱粉生産

関税引上げ後、澱粉の生産は順調に伸びて、

表3 明治・大正年間の鹿児島県の主な畑作物面積(単位:ヘクタール)

年次 畑作物面積	明治24年	明治30年	明治40年	大正1年	大正10年	大正15年
作物名	145,962	160,792	160,736	163,581	166,685	161,680
かんしょ	39,927	42,025	47,964	43,005	41,855	39,972
あ わ	21,708	27,242	27,059	25,639	23,185	20,306
そ ば	13,351	15,693	16,537	13,383	12,816	11,483
だ い ず	7,912	9,797	13,036	16,042	20,435	20,083
た ば こ	1,683	2,997	4,194	4,328	5,750	6,848
ち ゃ	1,227	1,532	1,994	2,379	2,788	2,819
く わ	655	1,485	4,082	5,805	7,029	9,027

(岡氏資料)

企業も安定的な方向に向ってきましたが、この時期昭和12年7月、北支の盧溝橋に於いて放たれた一発の銃声によって、日本は太平洋戦争へと突入していきました。これ以後、国内の物資は全て国家の統制下におかれ、まさしく国を挙げての動員体制がとられることになりました。

1938年（昭和13年）1月には米穀配給統制法が公布され、甘しょも価格統制令の公布によって甘澱11円50銭に決定されました。1940年になると、青果物も配給統制令のもとで運用されるようになり、澱粉類も配給統制令が施行され、国の管理体制の中で運用されるようになりました。

1941年（昭和16年）になると、蕎麦類も配給統制になり、澱粉の統制令が施行されてから澱粉については日本澱粉株式会社が設立され、それが統制株式会社となって澱粉の取扱いを行うようになりました。

当時は澱粉製造業者の規模は極めて零細でしたが、産業としては極めて活気を呈していました。特に戦中の軍需用アルコール原料として甘しょは栽培が伸びて、この頃の甘しょ澱粉の生産動向をみると、甘しょ作の重要性が一目でわかる気がします（表4）。

澱粉工場が、本格的に九州地域、特に南九州に立地をはじめたのは昭和7、8年頃からで、広島県からの業者がどんどん進出を行い、県内の畑地域に大小の澱粉工場が建設され、

表4 昭和年代終戦時までの甘しょ澱粉の生産(全国)

年次	生産量	年次	生産量
昭和元年	13,781 t	昭和11年	61,968 t
4年	15,420	14年	99,393
6年	23,133	16年	90,547
8年	24,705	18年	61,560
10年	36,018	20年	17,318

それにつれて地元の農協、有志による企業的な経営がすすめられてきました。昭和13年頃からは、むしろ航空燃料無水アルコール工場の建設が見られるようになり、昭和15年になると、澱粉類の統制のため、工場の新設はできなくなりました。

9. 戦後の澱粉工場と澱粉生産

昭和20年8月、終戦によって日本の食糧は極めて不足し、澱粉も主食として配給の必要性に迫られました。昭和23年からは、澱粉業務も食糧配給公団に移管させられ、澱粉類を原材料とする業務用は、全て公団の管理の下で販売取扱いが行われるようになりました。昭和24年には公団も廃止され、甘しょ、澱粉ともに統制がとかれ自由商品扱いとなりました。

尚、終戦時における甘しょ澱粉の生産と工

表5 終戦直後の甘しょ澱粉の生産数量と工場数(昭和21年)
生産量の単位千貫

府県名	生産量	工場数	府県名	生産量	工場数
東京	121	3	千葉	3,543	194
神奈川	649	20	茨城	1,282	76
埼玉	1,189	45	佐賀	39	6
群馬	691	18	長崎	237	44
栃木	85	10	熊本	414	41
関東小計	7,560	366	大分	77	5
愛知	876	27	宮崎	863	46
三重	110	10	鹿児島	1,613	121
岐阜	106	3	九州小計	3,243	263
静岡	878	39	福島	26	1
和歌山	56	1	新潟	49	4
広島	446	12	富山	35	3
山口	14	1	石川	12	1
岡山	25	2	福井	65	3
愛媛	225	21	長野	25	2
香川	14	2	島根	32	5
徳島	46	3	鳥取	72	3
高知	224	14	その他小計	316	22
中部小計	3,020	135	合計	14,139	786

(関氏資料)

場の分布の状況は、表5のとおり、かなり全国的に広く分布しているのがわかります。

10. 昭和中期の澱粉の動向

戦後においては、甘しょの食糧としての位置づけが大きかったため、澱粉の生産も年間4万t～5万tにとどまっていたが、昭和25年の統制撤廃、工場建設の凍結がとかれると、また澱粉産業は活発になってきました。

その年の6月、朝鮮動乱が起これ、国際情勢の緊迫化と特需の増加によって、更に澱粉業界の新たな需要拡大も生まれてきました。

この頃の農家の経営について一言ふれておきますと、農家経営は戦前戦後を通じて大きな変化はみられなかったのですが、昭和34～5年頃から専業化、大規模化が図られはじめました。それまでの畑作農業は、甘しょ主作で裏作に麦、なたねを作付する輪作体系が多く、ほかに陸稲、大豆、そば等との組み合わせによる自給生産型の農業でした。

昭和30年代は、国内産澱粉については政府が買上げを行い、これを売却する方法で、思うように消化がすすまず、政府の在庫が過剰になりましたが、ぶどう糖の工業化が成功し企業の発展がみられました。

しかし昭和37、8年になると、コーンスターチの増産、砂糖の自由化の影響で澱粉は非常な苦境に立ちいらしました。

昭和40年から関税割当制度が発足し、昭和43年からはとうもろこしの抱き合わせ制度が導入されて、国内産甘しょ澱粉の安定的な流通が図られるようになりました。

しかしながら、この間、澱粉企業はさまざまな苦業と試練に耐えながらの振興が図られたものの、昭和39年をピークにして全国で1852もあった澱粉工場が、今日ではわずか66工場、うち鹿児島が52工場と減少してしまいました。

戦後の澱粉工場の推移をみると表6のとおりです。

11. 平成の甘しょ澱粉の生産と需要

澱粉の総需要量は、年間280万t程度が見込まれています。

国内産いも澱粉は、甘しょ、馬鈴しょ澱粉を合せて約40万t弱の生産がありますが、これもとうもろこしの抱き合わせ販売制度の運用によって販売されており、国内産澱粉価格はコンソ価格と太刀打ち出来る状況にはあ

表7 甘澱、馬澱の生産とその生産比率
総生産量に対する比率

(単位屯)

区分 年度	本 県			全 国		
	農 協	業 者	計	農 協	業 者	計
昭和30年	82	241	323	—	—	0
31年	79	261	340	533	1,282	1,815
40年	86	296	382	315	924	1,239
50年	37	44	81	50	69	119
60年	30	30	60	32	46	78
平成元年	30	30	60	32	43	75
5 年	18	28	46	19	36	55
6 年	19	28	47	19	35	54

区 別	甘 澱	馬 澱	計	甘 澱 比
昭和20年	17,318 トン	25,000 トン	42,388 トン	40.9 %
25年	206,250	86,250	292,500	70.5
30年	442,500	97,500	540,000	81.9
35年	461,445	157,875	619,320	74.5
38年	739,006	155,000	894,006	82.9
40年	549,648	247,680	797,328	68.9
50年	97,965	202,136	300,101	32.6
60年	142,582	266,183	408,765	34.9
平成元年	121,298	235,113	356,411	34.0
4 年	95,000	250,000	345,000	27.5
6 年	88,221	261,000	349,221	25.3
7 年	87,776	262,000	349,776	25.1

りません（表7）。

近年は、食生活の変化、経済の不振等によって、糖化製品、異性化糖等の伸びにもいささか翳^{かげ}りが見え始めてきています。

甘しょ澱粉に限って考えてみれば、甘澱粉なくてはならない製品である春雨、マーボー豆腐、水菓子、クズ代用等特定の消費も考えられるが、今後に新たな用途開発が待たれる処です。

甘澱粉もユーザーから好まれる製品づくりに努め、甘澱粉の良さが認められる品質の向上が大きな課題ではないかと考えます。

近年は、天日乾燥による特殊澱粉の需要もだんだん用途が少なくなってきたと聞いていますが、需要が横ばいの澱粉環境からすれば、まだまだ高品質、高級志向の澱粉需要が考えられるのではないかと、医薬品、特殊加工品等にはのかな期待もつないでいるところです。

甘しょは、南九州の畑作農業の中で、今後とも畑作輪作体系を確立し、農家の経営安定を

表8 甘しょ用途別生産量の推移(鹿児島県)

区 分	3 年	4 年	5 年	6 年	比 率
澱粉原料用	286,561 ^t	280,715 ^t	191,508	259,350 ^t	53.9%
青 果 用	36,630	39,917	34,400	38,872	8.1
焼 酎 用	40,958	60,900	48,100	53,352	11.1
加工食品用	22,805	32,230	25,200	40,626	8.4
そ の 他	78,646	85,638	45,192	88,900	18.2
合 計	465,600	499,400	344,400	481,100	100

図るうえで欠くことのできない作物であり、また今後もなくしてはならない甘しょ澱粉であります。

県は、甘しょを利用した加工食品や青果用甘しょの普及に力を入れてはいますが、これもなかなか思うように伸びてくれません（表8）。

さすれば、畑作農業のあるかぎり、南九州の畑地地の甘しょ、甘しょ澱粉問題は、永久のテーマとして残ってゆくものと考えられます。

12. むすび

今回は、甘しょ澱粉の歴史的な生産動向について述べてきましたが、甘しょ澱粉については、品質、製造コスト、工場規模、排水処理等問題はまだまだ山積しています。今、国は、ガット・ウルグアイラウンド対策としての「いもでん粉工場再編整備対策事業」を実施して澱粉工場の体質改善、工場の施設の合理化、適正生産のため、工場配置対策に取り組んでおります。私共、澱粉製造を行う当事者として、国、県の指導を仰ぎながら、自らも精一杯努め、工場の生き残りをかけて頑張っています。

今後とも皆様のご協力を期待しつつ、筆を置きます。（完）

◆農業を女性の視点で見つめる

「日本女性学研究会」の富士谷あつ子さんが、「女子農業従事者教育に関する研究——女性学の視点から」と題した論文で、京都大学から農学博士の学位を受けた。

論文では、日本農業就業者のうち女子は過半数を占め昨今の農業の担い手になっているのに、取り分をもらう者は少なく、殆ど財産はない。

農協の役員や農業委員も女子の比率は低く、男性は自営業主なのに、女子は補助的な家族従業員の傾向が強い、と指摘している。

だから、女子で支えられている農業の見直しを経て、さらに「生活改善グループ」や「地域婦人会」といった女性団体を踏まえ、女性の自立と地位向上の促進には、「力をつける教育」が必要とし、男女が話し合える学習の機会をつくり出さなければならないと提言している。